

Ⅶ-25 ビオトープ公園計画について ～自然環境の復元と保全～

(株) フジタ建設コンサルタント

犬伏 潔

(株) フジタ建設コンサルタント

正会員 ○横田 博靖

(株) フジタ建設コンサルタント

壽賀有紀子

1. はじめに

近年、人々がものの豊かさより、うるおいや安らぎといった精神的な豊かさを求めるようになり、それが自然への関心をよりいっそう高めているように思われる。河川整備においても、生命・財産を守り、生活の利便性を向上させるための治水・利水機能重視から、自然豊かな川・地域の文化を育む川・そして子供たちが自由気ままに自然にふれあい遊べるような川へ、そんな川づくりが求められるようになってきている。本報告は、このような背景をふまえて、自然環境の復元と保全を目指したビオトープ公園計画について紹介するものである。

2. ビオトープ公園の概要

本ビオトープ公園は、徳島県が平成6年度より整備を進めている宮川内谷川の整備区域内のスポットとして位置づけられている。

宮川内谷川では、生態系に配慮した河川環境を復元・保全するとともに、親水活動の可能なエリアを整え、自然と人間との共生を目指した河川整備を計画している（改修の対象区間は、約5.0km、計画確率規模は1/50年、計画高水流量は $200\sim 374\text{m}^3/\text{s}$ ）。

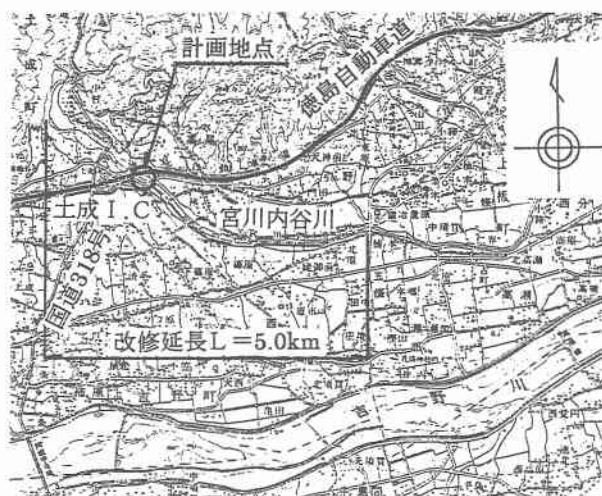


図-1 計画地点位置図

3. 地域特性

ビオトープ公園の計画されたエリアは、宮川内谷川右岸側の河川占用区域であり、県道を挟んで御所小学校が隣接することから、町がアスファルト舗装を行い、各種行事の際の臨時駐車場として利用されてきた区域である。また、近傍の徳島自動車道土成 I.C. は国道 318 号と直結されており、当地は地域幹線道路網の要衝に位置している。

4. 基本方針

ビオトープ公園は、アスファルト舗装化された無味乾燥なエリアを、宮川内谷川ビオトープネットワークの重要スポットとしてとらえ、自然生態系の復元と保全を図ることを基本方針とした。これまで切れ切れになってしまっていた生態系のつながり、人と自然とのつながりを回復し、大きな自然の流れ、連続性を少しずつ取り戻していきたい、そんな思いから自然と人のふれあえる公園とすることを目標にした。

5. 基本計画

5-1. 現況把握と整備構想

周辺環境等の事前調査結果をふまえ、整備エリア内で実現可能な生態系の整備構想を十分検討する。

5-2. 周辺地域への配慮

子供たちの意見を取り入れた水辺づくりを行う。そのため御所小学校に対してアンケート調査を行い、子供たちの意見の把握に努めるとともに、河川整備についても理解を深めてもらった。

6. 具体事例

6-1. 池と小川の形成

計画区域内にはもともと存在しなかったが、地形的条件により宮川内谷川からの取水が可能であったため、池と小川を形成した。水生ビオトープの重要な施設と位置づけている。

6-2. 河畔林

宮川内谷川整備計画のテーマというべき緑のネットワーク構想。潜在自然植生による河畔林づくりを小小学校の児童による植樹活動として行った。

6-3. ビオトープ構成工

計画区域内にビオトープ構成工として、小鳥塚・小鳥の止まり木・石積み・丸太積み等を設置した。これらは人工的な構造物であるが、小動物や昆虫にとっては格好のすみかとなる。

6-4. 駐車場

現存の機能として駐車場を部分的に残した。ただし、駐車場もビオトープ構成工の一部として植生に配慮した構造とした。

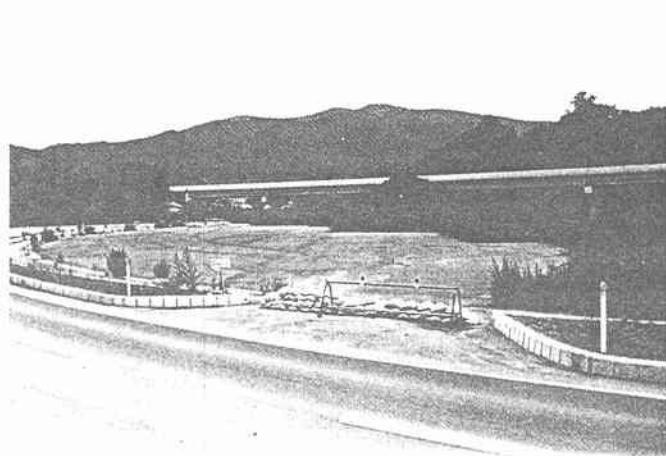


写真-1 ビオトープ公園整備前



写真-2 ビオトープ公園整備後

7. おわりに

現在、御所小学校の子供たちは、学校そばのビオトープ公園を「なかよしランド」と名づけ、遊び学ぶ場として親しんでいる。このようなビオトープ公園計画は、自然との共生を体験するための教材にもなり、河川整備の大変有効な手段といえる。しかし、ビオトープは一つのまとまった生息域であり、施工後3～5年は種の入替わりが激しく、目標生態系の実現に向けての維持・管理が必要である。特に、施工後の1年間の管理は非常に重要である。

今後の課題としては、設計から施工へのフォローアップや、モニタリングの実施、管理組織の確立が挙げられるほか、工事段階から生態系に関する知識を収集・伝達し、関係者相互で認識を深めあうことが必要である。

ビオトープ公園計画を行うに当たり、徳島県川島土木事務所の関係各位、並びにエコロジーの森を創る会会長である森本康滋氏には、資料の提供や貴重な助言を頂いた。ここに深く感謝の意を表します。



写真-3 なかよしランドとしてのビオトープ公園